



自己視線恐怖・自己臭恐怖症患者に対する一作業療法例

山田, 大豪

(Citation)

神戸大学医療技術短期大学部紀要, 8:265-268

(Issue Date)

1992

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/80070222>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/80070222>



自己視線恐怖・自己臭恐怖症患者 に対する一作業療法例

山 田 大 豪

はじめに

自己視線恐怖・自己臭恐怖症とは、「自分が相手を見てしまうために、相手に不快な感じを与えている。」、また「自分の身体から嫌な臭いが出ているために、相手に不快な感じを与えている。」と確信して悩む病態をいう¹⁾。これは精神医療の臨床において珍しい病態ではないが²⁾、作業療法を実施した報告は少ない。今回、この病態をもつ患者に対して作業療法を実施し、作業活動を通じて症状の改善がえられた。その改善のプロセスを患者の生育歴との関係から考察を加えたので、その結果について報告する。

生育歴

患者は、21歳の未婚の男性で、3歳までは母親に育てられたが、患者が3歳の時、母親が看護婦として働くことになったため、患者の養育者は祖母に代わった。患者は一人っ子であるため過保護に育てられたようであったが、「食事の作法」や「部屋の整理」など患者に対しての養育態度は、両親・祖母共にかなり厳しかったようで、家の中では患者はかなり窮屈な思いをし、常にビクビクしていたとのことであった。だから、患者は、自分の性格を小心でかなり神経質になったのであると述べた。小学校では水泳、野球などやっていたが、我が強く負けず嫌いなところがあり、野球で友達が上手に打ったり取ったりできて、患者が巧くできないと、悔

しがって考えこんだりするところがあった。なんでも完全にできないと気がすまなかった。このころ一人で自室で本を読んだりテレビを視たりすることが多かった。中学の頃、女性の前で赤面し、自分の顔が醜くて他人を不快にしているのではないかと考えることがあった。高校2年のとき、自分の視線が他人に迷惑をかけていると思うようになり、登校しづらくなり、1ヶ月休学した。復学後も同状態が続いたが何とか卒業はできた。高校卒業後は、自宅でテレビ、心理学の本をみたり、CDを聴く毎日であった。

現病歴

高校入学以降、自分の視線が他人に迷惑をかけているのではないかという自己視線恐怖は続いており、さらに自分の出す音（食事時の咀嚼の音、自分の咳）が気になり、その音が回りの人に不快感を与えていると感じていた。高校卒業後1～2年は、トイレに行くとき臭いが、自分につくような気がして、特に大便後トイレトペーパーで念入り（20～30回）に拭いたあと風呂場でシャワーを浴びるという生活が続いていた。通院は続いていたが症状が改善しないため、森田療法を希望して当所へ入院した。医師、看護婦によって森田療法的接近が2ヶ月間、試みられたが、症状の改善が認められないため、著者に対して作業療法が依頼された。

作業療法

森田療法での症状改善に至らなかった理由として考えられることは、患者は重作業期に至っても、看護婦に十分に依存できず、さらに三人以上の集団になると、黙り込んで話が出来なかったり、その場から立ち去るという状態が続いたことがあげられ、このため作業療法の処方がされた。作業療法に対するオリエンテーションについては、著者が「作業療法は週1回の頻度でやりたいと思います。その時間でできる活動を2人で一緒にして、進めていきたいと思います。」と説明した。患者は「それは、〇〇ということですね。」と確認し理解を示していた。患者は作業療法についての簡単な知識はもっていた。はじめから本人の判断や今後の希望を重視することは、かえって患者の負担になると考え、当面は著者の判断で進め、本人の気持ちを確認しながら実施していくことにした。個人OTが2～3回進と、患者は学生時代の部活のことを言葉を選ぶように話したり、著者の年齢を尋ねたりと、著者と自然な会話をもつようになっていた。作業療法開始時は、著者は患者の言葉に耳を傾け、患者を受容することにつとめた。このことにより患者は自分が認められ受容されたことにより少しずつではあるが行動の面での変化が生じた。すなわち、自分の発する咀嚼の音で他患が迷惑していると感じながらも、食事時間を少しずらすなどし、できるだけ集団に入るよう努力していた。トイレで異常に時間を使うことは少なくなっていった。中学の時テニス部に入っていてテニスの経験があったため、患者の確認をとり今後テニスを二人でしていくことにした。患者は上手にボールを打ち返したりでき、著者がそのことを評価すると「そんなに上手でもないです」と言いながらも嬉しそうにテニスに取り組んだ。個人OTの回数が進むにつれて、取れそうもないボールにラケットを投げて、ふざけてみたりなど、患者の気持ちに余裕が感じられた。患者は自分で使うボールを準備して、著者よりも先にコートに立って待っていることがあった。テニス終了後、地面座って雑談をすることがあった。そのとき、両親の話

ができて、患者は「2～3年、家でブラブラしていましたが、ブラブラするのは2～3年で十分ですね。あとは退屈になりますよ。」と言いい、「お母さんが早く職場をみつけなさいとか、アルバイトでもいいから。」と、とにかくうるさく言うという内容であった。父親とはあまりしゃべらないと言った。また食事中に、自分の出す音が他人に迷惑になっているのではないかと、自分が何か臭いのではないかと、他人が感じているのではないかと心配であるとも訴えることがあった。著者は、中立的な態度で患者の言葉を傾聴することにつとめていた。そのようにしていると、患者とテニスをやり休憩中に、患者の方から「先生、テニスをやりましょう」と自分の意志で自発的に自己表出を行うことが可能となると共に、症状の方も少しずつ改善の方向に向かっていった。雨の日は室内で将棋やTVゲームを二人でして、楽しんだ。この活動は対面で落ち着いて取り組むことができた。将棋は勝ち負けがはっきりしていて、患者の負けん気を刺激しそうであったが、患者は負けたときは「強いなー。」と顔を真っ赤にして言ったあと、「勝負は時の運。」と言って笑い、「もう一回しましょう。」と、ますます自発性が発揮されるようになると共に症状の改善もなされ治療の終結となった。

考 察

この病態の患者は一般に強い治療意欲をもっており³⁾、今回、経験した症例も森田療法を希望するという前提での入院であった。しかし、森田療法中、患者はその集団を回避し、これは自分の視線が、他人を不快にしているという感情の作用によるものであると考えられた。このように、集団にとけこめず、集団を回避してしまう患者に認められる不安は、言いかえれば、他人を前にしたとき、自分の主張、自分の主体性が脅かされ、それが崩れることに対する不安とも考えられる。患者の負けず嫌いで我が強い性格は、他人に巻き込まれ、強く影響され、支

配される不安からくるものであり、患者の「自分自身のなさ」「主体性のなさ」をあらわすものであると考えられる。

著者は患者に対して、特別な操作はくわえず、それぞれの作業活動時間を快く過ごし、患者と共に熱中し自然な感情を出した。患者はその作業活動で意欲的に楽しく取り組み、集団でみられた不自然な動きは見受けられなかった。患者は小学、高学年ごろは、スポーツに励んではいたが、男の子同志で連なって無邪気にいたずらをしたり、時間を忘れて夢中になって遊んだという体験の様子が乏しい印象を受ける。患者にとって水泳や野球は、勝ち負けを決める活動であり、楽しんで友達とふざけるというものではなかったのではないだろうか。学童期、特に前思春期⁴⁾のころ気が合う仲間との遊びの中で、自分の主張が受け入れられ、また受入れられないという体験を通して、自分の行動、行為が自分で決められ、「自分の行動はこれでいいのだ」と自分の中で確かに感じられる経過が、重要なのではないだろうか。

今回のテニスという活動は患者にとって、ふざけて楽しめる場であった。これは患者の主体性を育ていく過程に必要な条件であり、患者を活動的にし、患者なりの著者との関係の取り方へと進んでいったのではないだろうか。

作業療法は、今回の症例が現在も発達過程にあるといあるという事実を考えると、その発達段階にそって援助の手を差し伸べ発達を促そうとする経過を、作業活動を含んだ治療者との関係の中で再び患者に提示できるという点で重要な意味をもつと考える。

お わ り に

今回の症例から次のことが確認された。

1. 一人の人間として患者を受け入れ、共に活動することによって、患者の自発性が促された。
2. 作業療法は、患者のこれまでの生育の過程を考慮したうえで、作業活動を含んだ治療者

との関係の中で、患者に提示できるという点で重要である。

文 献

1. 村上靖彦：「思春期妄想症」－対人恐怖症の特殊なかたち・近縁の病態－ 精神科MOOK 対人恐怖症 No.12, 金原出版, 1985, p. 43～50
2. 青木勝：視線恐怖・体臭恐怖－妄想離脱後の治療像をめぐって－ 臨床精神医学11；805～811
3. 村上靖彦：思春期妄想症について. 笠原嘉, 他(編), 青年の精神病理. 弘文堂1976
4. 清水将之：青年期の精神科臨床, 金剛出版, 1989, p. 275～276.
5. 野沢英司：青年期の心の病. 星和書店, 1984
6. 鍋田恭孝：役割的自己の病理－その歪んだ二者関係. 精神科 MOOK 対人恐怖症No.12, 金原出版, p. 76～88

A Case Study of the Patient who Complains of the Fear of Eye-to-Eye Confrontation

Taigo Yamada

ABSTRACT : A patient reported here was a 21-year-old male with a fear of eye-to-eye confrontation. He was obsessed by the fear of his unintentional staring at people with strange looks and could not contact with people on the eye-to-eye basis. He was hospitalized for Morita therapy, but was referred to an occupational therapist for better treatment after unsuccessful trial of Morita therapy for 2 months. The reference aimed at the improvement of a man-to-man relationship. Considering the life history of his pre-adolescence when he must learn social norms for acceptance and rejection, the author took the role of a play-mate. Tennis, chinese chess, and TV games were played once a week, for better communication with the patient. As a result, the patient could enjoy those activities, and began to communicate with the author comfortably, and finally the fear of the eye contact disappeared. He was discharged and has successfully adjusted to his family life. It is concluded that occupational therapy was necessary to make the patient get along with other persons.

Key words : Fear of eye-to-eye confrontation,
Psychiatric occupational therapy,
Role of a play-mate,
Improvement of a man-to-man relationship.